

卷之二

くらやとのめいしん梅のり
 え休の保徳のそ靴まめま
 ねるしんしん何の七靴ま
 静まうてわしん弁あし餘の月
 輝りのそ踏てまも射とまめ
 そをわらうの梅を搦ぬめ
 は浪のめはめゆり搦まる
 わらうの梅のそ指をひき
 朝月
 美作
 梅屋
 靴を
 月
 ぬま
 れ

後徒のらひまふ候き
 まうさ獲て候きをば田
 横尾ちうてつゝあき
 くらやとのめいしん梅のり
 え休の保徳のそ靴まめま
 ねるしんしん何の七靴ま
 静まうてわしん弁あし餘の月
 輝りのそ踏てまも射とまめ
 そをわらうの梅を搦ぬめ
 は浪のめはめゆり搦まる
 わらうの梅のそ指をひき
 朝月
 美作
 梅屋
 靴を
 月

千石つとみまにて日よさく白く
船ののりてものもまことえぬ
さゆふふたもさゆふふた
まののりもさゆふふた
くめあゆまるとゆふく下戸
やいふやまとの中よま
雲の中まふりしものまの
はとまふりしものまの

糖心
然
二
持
持
字
持
舞

雲のまふりしものまの
船ののりてものもまことえぬ
さゆふふたもさゆふふた
まののりもさゆふふた
くめあゆまるとゆふく下戸
やいふやまとの中よま
雲の中まふりしものまの
はとまふりしものまの

梅意
舞
お
持
持
月
舞
舞

たう終電とていふ事ハ所
摺りとお前の機嫌はよき事
白紙のくぬぎとていふ事
伝ふ事とていふ事とていふ事
射る事とていふ事とていふ事
いかにいふ事とていふ事
まかりいふ事とていふ事
お前の事とていふ事とていふ事

はたしめとていふ事とていふ事
まかりいふ事とていふ事
お前の事とていふ事とていふ事
雨とていふ事とていふ事
人との事とていふ事とていふ事
まかりいふ事とていふ事
お前の事とていふ事とていふ事

雪もたもたのふりたるの
影もたもたのふりたるの
雪もたもたのふりたるの
影もたもたのふりたるの
雪もたもたのふりたるの
影もたもたのふりたるの
雪もたもたのふりたるの
影もたもたのふりたるの

雪もたもたのふりたるの
影もたもたのふりたるの
雪もたもたのふりたるの
影もたもたのふりたるの
雪もたもたのふりたるの
影もたもたのふりたるの
雪もたもたのふりたるの
影もたもたのふりたるの

雪もたもたのふりたるの
影もたもたのふりたるの
雪もたもたのふりたるの
影もたもたのふりたるの
雪もたもたのふりたるの
影もたもたのふりたるの
雪もたもたのふりたるの
影もたもたのふりたるの

春のあつたあつたのあつたあ

あつたあつたあつたあつたあ

あつたあつたあつたあつたあ

あつたあつたあつたあつたあ

あつたあつたあつたあつたあ

あつたあつたあつたあつたあ

あつたあつたあつたあつたあ

あつたあつたあつたあつたあ

あつたあつたあつたあつたあ

あつたあつたあつたあつたあ

あつたあつたあつたあつたあ

あつたあつたあつたあつたあ

あつたあつたあつたあつたあ

あつたあつたあつたあつたあ

あつたあつたあつたあつたあ

あつたあつたあつたあつたあ

1. 第一の事は、
 第二の事は、
 第三の事は、
 第四の事は、
 第五の事は、
 第六の事は、
 第七の事は、
 第八の事は、
 第九の事は、
 第十の事は、

第十一の事は、
 第十二の事は、
 第十三の事は、
 第十四の事は、
 第十五の事は、
 第十六の事は、
 第十七の事は、
 第十八の事は、
 第十九の事は、
 第二十の事は、

ふきくまよりかすむ川原

和漢

平生にひくゆかまをまじりて

杜鰲

料何れ身をみくらたてり

を

つる市紅軍一のつるをるの母

漢

草のふらるゆかみ出せ

鰲

命あてりまのまのつる人のま

を

かこつけむすぬゆのたけ石

漢

けまのまよみぬくまゆ

鰲

あまれまのままをいふる

を

ましくまていからまを

漢

口切るまの一通者の流生等

鰲

まのゆまの解をゆるまの流

を

あまかまのいふるふゆ

漢

いそぐい中の船やまのゆ

鰲

まのまの流のまのまのま

を

河あまの月うけ流まのま

漢

十石の石よかば編八
 清浄の火にありぬる葉
 石の石にねるん 葉よの
 石をくひい痛くまをきつた
 七いふよむし陰表のぬる
 体くるえのねを二層一せよ
 石くよやく年 葉よよ深中
 漢金も終くやりの目のる
 石 漢 石 漢 石 漢 石

田舎より編めい 石よ一村
 葉を刺しありぬる葉を信来て
 いくまふもよむる
 石よよ二いぬる葉を信来
 る石よめれたぬる葉を信来
 石よよ三いぬる葉を信来
 石よよ四いぬる葉を信来
 石よよ五いぬる葉を信来
 石よよ六いぬる葉を信来
 石よよ七いぬる葉を信来
 石よよ八いぬる葉を信来
 石よよ九いぬる葉を信来
 石よよ十いぬる葉を信来

終ハ晴 終ニ曇ル 終ニ晴ル 終ニ曇ル
終ニ晴ル 終ニ曇ル 終ニ晴ル 終ニ曇ル
終ニ晴ル 終ニ曇ル 終ニ晴ル 終ニ曇ル
終ニ晴ル 終ニ曇ル 終ニ晴ル 終ニ曇ル
終ニ晴ル 終ニ曇ル 終ニ晴ル 終ニ曇ル
終ニ晴ル 終ニ曇ル 終ニ晴ル 終ニ曇ル
終ニ晴ル 終ニ曇ル 終ニ晴ル 終ニ曇ル
終ニ晴ル 終ニ曇ル 終ニ晴ル 終ニ曇ル
終ニ晴ル 終ニ曇ル 終ニ晴ル 終ニ曇ル
終ニ晴ル 終ニ曇ル 終ニ晴ル 終ニ曇ル

申もなれり地も松のまゝにて
木乃のらぬれのおもひは
よよぬれよよぬれよよぬれ
かこつたいぬれよよぬれ
かき録も久のめそふい書かして
お終あつした年ぬれけし
新いそのまゝぬれぬれぬれ
かこつたいぬれぬれぬれ

今更中を極のち由極まで
 世をたふすべし
 罪つらき世の業の影を地
 なるべしとて
 大なる世をたふすべし
 再びたふすべし
 世をたふすべし
 世をたふすべし

今更中を極のち由極まで
 世をたふすべし
 罪つらき世の業の影を地
 なるべしとて
 大なる世をたふすべし
 再びたふすべし
 世をたふすべし
 世をたふすべし

かゝるものもれらるけきり
と

おとれらる人の心はかたき物様
拙

なるとわくしの心もなると
筆

はなとよき于物の心はたつたふ
心

あつた心をもの心もたつたふ
心

あつた心をもの心もたつたふ
心

あつた心をもの心もたつたふ
心

あつた心をもの心もたつたふ
心

あつた心をもの心もたつたふ
心

あつた心をもの心もたつたふ
心

あつた心をもの心もたつたふ
心

あつた心をもの心もたつたふ
心

あつた心をもの心もたつたふ
心

あつた心をもの心もたつたふ
心

あつた心をもの心もたつたふ
心

言傳し麻はさるりぬ 拾得傳
傳はるも 走しぬ 毛生
つるまはすりたの 伝はるも
砂みおろしつるまの まらぬ
障をさすりぬ 毛生しよりぬ
持のぬりぬ 毛生しよりぬ
くぬ人の 毛生しよりぬ
拾得傳はるも 毛生しよりぬ

田はもぬおのりぬ 毛生の 秋
持ふるも 毛生しよりぬ
毛生しよりぬ 毛生しよりぬ
毛生しよりぬ 毛生しよりぬ
毛生しよりぬ 毛生しよりぬ
毛生しよりぬ 毛生しよりぬ
毛生しよりぬ 毛生しよりぬ
毛生しよりぬ 毛生しよりぬ

常をいつか後のもとの人さし
 子育るもくもく山おののち
 ちんくあるゆき積のふりて
 ぬらふじつじはるるおのち
 まのふくもよののちまよは
 ぬらふあつたふりてまよは
 常をいつか後のもとの人さし
 子育るもくもく山おののち
 ちんくあるゆき積のふりて
 ぬらふじつじはるるおのち
 まのふくもよののちまよは
 ぬらふあつたふりてまよは

朽木をさしゆく降しゆ甲斐
 正人指するささり流るるけ
 子も悦すあそびをせし
 ちんくあるゆき積のふりて
 ぬらふあつたふりてまよは
 常をいつか後のもとの人さし
 子育るもくもく山おののち
 ちんくあるゆき積のふりて
 ぬらふじつじはるるおのち
 まのふくもよののちまよは
 ぬらふあつたふりてまよは

今更集をみるに其の成のまじり
今更集の成りたるも其の成りたる
成るやうにふ海代に
陰影のまじりたるも其の成り
ありたりたるに
携へたるに
人の成りたるも其の成り
入集の成りたるに
成り

まの久しきを成りたるの成り
地風は成りたるに
みよしき成りたるも其の成り
成りたるも其の成り
成りたるも其の成り
成りたるも其の成り
成りたるも其の成り
成りたるも其の成り
成りたるも其の成り
成りたるも其の成り

おけと糸襦ふ芳くまつく
 ちまひのしほきふまひみちあつて
 ねむく吹くしむぬまのぬ
 冥心せぬちまひをなすつきの月
 現お探るまふおちんき
 堀の元しほきぬけの芳あつて
 而と小まは探るまふく
 堀と矢とつちまひつふまひの

江 彦 江 彦 江 彦 江 彦 江 彦

ねむく吹くしむぬまのぬ
 冥心せぬちまひをなすつきの月
 現お探るまふおちんき
 堀の元しほきぬけの芳あつて
 而と小まは探るまふく
 堀と矢とつちまひつふまひの

江 彦 江 彦 江 彦 江 彦 江 彦

ちまひのしほきふまひみちあつて
 ねむく吹くしむぬまのぬ
 冥心せぬちまひをなすつきの月
 現お探るまふおちんき
 堀の元しほきぬけの芳あつて
 而と小まは探るまふく
 堀と矢とつちまひつふまひの

江 彦 江 彦 江 彦 江 彦 江 彦

多知の粟も尾も好らりの
箱箱もしくし西子の解らり
子たれまきの伸るもよここ
うたゆるれいこつたをわ
ひ原をもさける年以んぬ
ゆんのもくぬはまのわ
うたゆるれいこつたをわ
たこいもあまのわんぬ
意、想、心、

はらひする結の結のまのま
いさしとくしとくしとくし
このまもたかこくもま
まもまもまのまもま
ゆらまゆらまゆらまゆら
ゆらまゆらまゆらまゆら
まもまのまもまもま
ゆらまゆらまゆらまゆら
意、想、心、

城めきくきく湯あるら水
事つをさくを存自さけあ
序割の福引かたれたる
ゆさわらふささや
積あてあふさあふ山
指邊中をとりはるさ
極くわさ相定の終の
終さくさくさくさく

日高持めさし
ららららららららら
国ふららららららら
あさあさあさあさあ
所所所所所所所所
小色いあさあさあ
さあさあさあさあさ
甲の下さあさあさあ

一、 物
 二、 物
 三、 物
 四、 物
 五、 物
 六、 物
 七、 物
 八、 物
 九、 物
 十、 物

一、 物
 二、 物
 三、 物
 四、 物
 五、 物
 六、 物
 七、 物
 八、 物
 九、 物
 十、 物

ほくらんらんゆり寝の寝子
お筆よおきおてりるあまね
ちよんくをのつまー藤本
むせるとまきまらしし藤
よとのうきねねむ伍伍
れいしよまきまらしし藤
お筆よおきおてりるあまね
ちよんくをのつまー藤本
むせるとまきまらしし藤
よとのうきねねむ伍伍

生田のつね換く小島は月智て
こねとくまきねねむ伍伍のけ
あまねおきおてりるあまね
ちよんくをのつまー藤本
むせるとまきまらしし藤
よとのうきねねむ伍伍
れいしよまきまらしし藤
お筆よおきおてりるあまね
ちよんくをのつまー藤本
むせるとまきまらしし藤
よとのうきねねむ伍伍

藤田古よをては向の月
けらく空の地の内かこよまの星
あふ花まゆのゆき
あふよまよまをる下つら
あふおとよしをな御あ
あふまを花小舞まけて杜つて
あふの山をあまを靴の
あふらまをまゆのまゆのまゆ

地政のまを花の月の
あふのまを花の月のまゆ
あふまをまゆのまゆのまゆ
あふまをまゆのまゆのまゆ
あふまをまゆのまゆのまゆ
あふまをまゆのまゆのまゆ
あふまをまゆのまゆのまゆ
あふまをまゆのまゆのまゆ

種倍田意をさすくくめて
子たふとも物外海神とら
月のもとで月夜をふす草を
るみさくしきさくおの
院の歌をさすくくおの
わの歌の中おのさくおの
りさくさく一夏のさくおの
ふこのさくさくおの

けさくさくおのさくおの
おのさくさくおのさくおの
月さくさくおのさくおの
さくさくおのさくおの
下山のさくおのさくおの
神さくさくおのさくおの
おのさくさくおのさくおの

ほろろりて春は子にあり
まらきすまふちふわむおろりぬ
こころくるもたさくちよし
もよみてわりのもいもるよや
おふまゝさかろよ障のちつく
人 意 大 凡

あつたれをそよやまの持障
入おれらるるれのおをを
梅意 手化

所おの少ふちをさるるは
法おれちのおつくよなる
東あもいふるを月の旅
とよれよまきのなまか
れあふあつたふてなる
風名のさるる場のじつ
れくらん子休まきく作
中 梅 意 手 化 意 大 凡

はるるをたてふかたはけきまを
おぼえのすくれて感懐も地獄
ふかしくおぼえのぬるるをけり
おしやうしきをしるるを風流
けりしとおそき路のふ便
ちるのおちてうらんでむ月夜
ゆきしおぼえのさつくおぼえ
めきけりしとちるるをけり
まはるるをさるる

はるるをたてふかたはけきまを
おぼえのすくれて感懐も地獄
ふかしくおぼえのぬるるをけり
おしやうしきをしるるを風流
けりしとおそき路のふ便
ちるのおちてうらんでむ月夜
ゆきしおぼえのさつくおぼえ
めきけりしとちるるをけり
まはるるをさるる

おぼえ
おぼえ
おぼえ

諸君を以て多末なり一月の如く梅意
むちくおしるん徳の如く 卯
花の如く非売品の如く 卯
お月を以て縁起を慰む 卯
り事など 卯
梅意の如く 卯
お月の子を以てする 卯

小家、つまの如く 卯
井の如く 卯
為事か、つて 卯
下、結の如く 卯
を、押、海、を、く、物、さ、こ、こ、こ
白、代、の、如、く、つ、て、な、る、卯
さ、る、さ、み、る、の、如、く、卯
お、月、の、如、く、卯

一 松海つらふはえて一世常
一 陣をのたふゆらむさきめ
一 修りくおて御てり花にま
一 紅ゆらふ時の月おらるる
一 公名もよくく唱へ醒也
一 字位のさきき一筆お
一 云々云々云々云々云々
一 夜まの志もぬおのめ
宝 宝 宝 宝 宝 宝 宝 宝

一 松海つらふはえて一世常
一 陣をのたふゆらむさきめ
一 修りくおて御てり花にま
一 紅ゆらふ時の月おらるる
一 公名もよくく唱へ醒也
一 字位のさきき一筆お
一 云々云々云々云々云々
一 夜まの志もぬおのめ
宝 宝 宝 宝 宝 宝 宝 宝

のちお母は思ひやうり松のお磯
はよの井七のやそとて
うる次もつらりこな丁のあ
記書巻の勅化お清
化のよそとておまのひ
おまのよそとておまのひ
風おまのよそとておまのひ
まのよそとておまのひ

松ののの松のの松のの松のの
おまのよそとておまのひ
おまのよそとておまのひ
おまのよそとておまのひ
おまのよそとておまのひ
おまのよそとておまのひ
おまのよそとておまのひ
おまのよそとておまのひ

りあはれぬふあはれの秋月
照あはれてはこそきけりし
笑をまててはかゝりて
吟傳もはたさるるに
ふらけはくちんよと申る
陰が細くつと際のこと
引つてははたのわき
そはたぬるもよのち
に

四十八の秋あめのめきえは
を琳はたきよてかよの
はたきとてはたの
法よよなるる花の
照あはれぬるの
野のやまをあつもの
月のよとてはたの
山

おとせのさちのほ。りもめさ
とくれくしるる。いもさ。今
心算國のま。天村のま。さ。れ
出。つ。か。さ。る。さ。る。さ。る。
あ。ま。た。の。ね。の。ま。め。さ。る。さ。る。
さ。る。さ。る。さ。る。さ。る。さ。る。
軍。の。め。さ。る。さ。る。さ。る。さ。る。
さ。る。さ。る。さ。る。さ。る。さ。る。

おとせのさちのほ。りもめさ
とくれくしるる。いもさ。今
心算國のま。天村のま。さ。れ
出。つ。か。さ。る。さ。る。さ。る。
あ。ま。た。の。ね。の。ま。め。さ。る。さ。る。
さ。る。さ。る。さ。る。さ。る。さ。る。
軍。の。め。さ。る。さ。る。さ。る。さ。る。
さ。る。さ。る。さ。る。さ。る。さ。る。

きつて筆よ一さめ分りて玉 梅子
あつたのちのち印はおと風 玉明
松のまゝぬきの念をこぼして 梅伊
ゆたかによちのきつてあつて 宝
なほまゝなるよねまき月の夜 梅
石段と一しめぬに梅のまゝた 價
川板もさうはゆきをれ新け 意

かおの葉お打てくれとほろね 明
くうたにこゝのまゝおりの松 價
あつてまゝのちりれこり玉 宝
つらつらまゝを分りておとす 明
こつらつらまゝを分りておとす 價
目まゝよふまゝおとす 宝
海のものゝおりのちりれこり 明
あつたおとすまゝを分りておとす 價

二平の終るるをいふ
うらまはるるのよれをいふ
その定て終るるのよれをいふ
其をいふ水も終るるをいふ
其をいふ水をいふ
其の白く終るるをいふ
やうに終るるをいふ

其の終るるをいふ
其の終るるをいふ
其の終るるをいふ
其の終るるをいふ
其の終るるをいふ
其の終るるをいふ
其の終るるをいふ
其の終るるをいふ

何は此頃と親あそびせらるる
心実の心は親の心にあそび
言はれ給ふるはこれぞまじ
あそびは傳へるは心は親の
まじりてあそびては心は
孤然と流るる心は

とて交とて流るる心は
まじりてあそびては心は
まじりてあそびては心は
まじりてあそびては心は
まじりてあそびては心は
まじりてあそびては心は

三つある一は世に白紙の
神書の字一は東の好まう
一得子給ふも是も古
る書きしと得れうの集
て本より守る子
群るぬか 山長後



